

プルースト的触覚

田 中 良

始めに

近づきたいが近づくことができない、触れたいが触れることができないという心理は、プルーストの想像力と大きく関係している。コンブレーでの散歩道の一つ、メゼグリーズの方は、「水平線のように近づけない (inaccessible) 何か」(I.132)¹⁾を主人公に感じさせ、主人公の憧れの的、ゲルマント公爵夫妻は、「幻灯に映し出されたジュヌヴィエーヴ・ドゥ・ブラバンのように全く手に触れることのできない (impalpables)」(I.169)人物のように主人公には思っていた。後にゲルマント家は「触れえないもの (l'intangible)」(IV.268)とも形容されている。この心理を形象化しているのは、『ジャン・サントゥユ』と『失われた時を求めて』にともにでてくるビー玉である。前者ではジャンが女友達のマリ・コシシェフから、後者では主人公がジルベルトからもらったあのビー玉であり、そのうちジャンのもらったものは、「大きくて、透明で、ある種の眼差しのようなやさしい光を」²⁾を放ち、その光は「ビー玉の中に囚われている小さな星で、手で握ってはいても触れることのできないわずかな光」³⁾であったという。ジャンにとってこの贈り物が貴重なのは、その中の光に触れることができないためであり、そしてその触れることができないという状態そのものがその光の魅力を創り出し、それを「禁断の美」として輝かせていたのである。主人公がジルベルトからもらったビー玉も同じようにその中で「金色の光」(I.395)を放っていた。プルーストはこうした心理と想像力の関連について、アルベルチーヌへの愛を引き合いに出して、「私たちが愛するのは、その外観が近づくことのできない (inaccessible) 何かを私たちに想像させる事物のみである」(III.Esquisse IX.1119)と、

草稿の中で述べている。つまり彼にとって近づくことも触れることもできないという心理は、想像力を作動させる一種の発火装置であった。そしてそのようにして膨らんだ想像力が現実によって裏切られ、失望へと変化してゆく過程が、『失われた時を求めて』という大河を支える重要な支流の一つであった。

しかしこうしたことは、観念の世界でのことであり、実際に接近し、接触するとなると話は別である。では実際に対象との距離をつめ、身体上の何らかの部位で対象に触れたとき、どのようなことが起こり、あるいは起こらないのか。少なくともこの場合問題になるのは、もはや想像力ではなく、触覚という感覚である。実際、プルーストの世界では触覚は、視覚のように目立たず、他の感覚に比べても下位にあることは否めないとしても、無視できない独特の働きをしている。ではそれはいかなる働きなのか。

I. 下位感覚としての触覚

最初の問題は、他の感覚に対する触覚の位置である。現象学の立場からメルロ＝ポンティは、視覚と触覚を比較して、視覚は事物の対象化を推し進めるが触覚はそれができない、なぜなら触覚は手を使うからであるとして、次のように述べている。「触覚感覚は我々の身体の表面に固着するから、われわれはそれをわれわれの前にくり広げることができないし、それはけっして対象になることがない。(略)触覚経験は私の〈前〉で生じるのであり、私に中心を置いていない。触れるのは私ではなく、私の身体である。私が触れるとき、私はいろいろなことを考えたりしない。」⁴⁾もちろんこの考えは、この哲学者の触覚についての結論ではなく、ここから「現象的身体の全体で触れるということ」に発展し、さらには身体と物との「合体 (communion)」にまで展開されるのだが、その出発点として触覚を下位感覚として位置づけていることに間違いはない。一方、心理学の立場から『触覚の世界』の著者ダーヴィット・カッツは、その序文の中で、「心理学のテキストでは、たいてい、いまだに感覚のレベルを上位と下位に分け、視覚と聴覚とを触覚よりも高い位置につけている」と述べて、触覚

の下位性を指摘している⁵⁾。いうまでもなく著者は、こうした心理学的常識を覆すために同書を書いたのであり、最終的に次のように触覚の価値を認めている。「知覚の観点からいえば、触覚は、他の感覚にまさる優位性を与えられなければならない。なぜなら、触覚は、実在感に関してもっとも強力な特徴を備えているからである。外的世界が実在しているという信念を発達させるとき、触覚は、他の感覚より圧倒的に大きな役割を担っているのである。(略)触れたものこそ真の実在であり、それが知覚につながるのである。」⁶⁾しかしこの心理学者も出発点はメルロ＝ポンティと同じで、下位感覚としての触覚というところから論を起こしている。

こうした触覚のとらえ方は、文学の世界でも変わりはない。一般的に、文学が作家の想像力によって生み出され、読者の想像力に働きかけるのであれば、物語に絡む感覚として、距離不在の直接的な触覚より、距離を必要とする間接的な視覚、聴覚の方が主要な働きをするのはごく自然である。ジャン＝ピエール・リシャルはフローベールについて、彼はあまり近くから見るとめまいが起こり、何も判断できなくなるという「接触の病」にかかっているという⁷⁾。同様にジャン・ルッセは『彼らの目は出会った (*Leurs yeux se rencontrèrent*)』の中で、スタンダールについて、「遠くから離れて愛することは最も執拗なスタンダールのテーマの核心である」⁸⁾と述べている。要するに文学における距離の問題を、リシャルは「接触の病」としてネガティブに、ルッセは「執拗なテーマ」としてポジティブにとらえているわけだが、いずれにしても対象との距離は、フローベール、スタンダールに限らず、プルーストを含めた多くの作家にとっての重要な問題であった。ということは、必然的に触覚は文学から遠ざけられるということでもある。ルッセの同書は、戯曲を除くフランス文学に表れた多くの出会いを採り上げ、それらを様々な項目に分類し、分析するという極めて興味深いものだが、そうした中に視覚、聴覚などをきっかけとしたものはいくつか採り上げられてはいるのに対し、触覚にいたっては唯一、『谷間の百合』でのフェリックスとモルソー伯爵夫人の出会いを指摘するにとどまっている⁹⁾。それはナポレオンの帰還を祝うトゥールでの

祝賀会で、横に座った見知らぬ女性の肩にフリックスは思わずキスをしてしまい、その女性が伯爵夫人であったというものである。しかしルッセも指摘する通り、主人公はキスの前に彼女の放つ香りに魅せられていたことから、この出会いは嗅覚に先行されていた。この出会いでさえ、触覚の下位性は否めない。

フランス文学に表れたレミニサンスを例にとっても、触覚は冷遇されている。プルースト自身小説の中で、その例としてネルヴァルの『シルヴィ』、シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』、ボードレールの詩を挙げているが（IV p.498）、ジャン・ポミエの指摘に従えば¹⁰⁾、それらはいずれも祭典の告示（視覚）、草の香り（嗅覚）、女性の香り（嗅覚）が過去の呼び水となっていて、触覚は関与していない。ポミエは『マルセル・プルーストの神秘主義』において、ルソー、フローベール、モーパッサンなどにおけるいくつかの他のレミニサンスを採り上げているが、それらの中にも触覚を媒体としたものはない。

II. 復権される触覚

プルーストにとっても触覚が下位感覚であることに変わりはない。しかし彼は触覚に対して決して無意識であったわけではなく、逆にそれを小説の中で復権させようとした様子が感じられる。

『失われた時を求めて』における触覚に関係するエピソードといえば、誰しもすぐにナプキンの感触を思い浮かべるに違いない。ゲルマント大公妃邸の書斎で、召使いの持ってきたこわばりのあるナプキンで口を拭った瞬間、その感触がかつてバルベック到着の第一日目に口を拭ったホテルのナプキンのものと同じであることを直感し、無意識的にかつてのバルベックが蘇るというものである（IV.447）。有名なレミニサンス体験の一つである。実はこのエピソードばかりでなく、これに類するものもこの小説を執筆する前の段階では構想されていなかった。レミニサンスに関する先行テキストともいえる『サント・プーヴに反論する』の序文に目を通せば、そのことがはっきりする。この序文では『失われた時を求めて』にもでて

くるいくつかのレミニサンス体験が語られている¹¹⁾が、それらを整理すると以下になる。語られる順に並べ、媒体となる感覚に分類し、かつ想起される（されない場合もあるが）過去を矢印で示したものである。

味覚：料理女の持ってきた紅茶とトースト→祖父の家での紅茶とラスク
運動感覚（触覚）：ある中庭の不揃いの敷石→サン・マルコ寺院の不揃いの敷石

聴覚：皿にスプーンが当たる音→転轍手のハンマーの音

視覚：窓にかけられた緑の布→光の中の蜜蜂、サクランボの匂い（具体的な過去は思い出せず）

：前に広がる小径、木々の並び→思い出せず

最初に、二番目の「不揃いの敷石」を触覚ではなく、運動感覚に分類したことについて説明しなければならない。心理学的にはこうした感覚は触覚に入れてもおかしくないはずで、実際にこの体験を触覚に分類している研究者もいる¹²⁾が、この瞬間の感覚を正確に見れば、主人公に幸福感をもたらした感覚は、敷石に触れた感覚ではないことがわかる。その瞬間は、不揃いの敷石でつまずいた直後、「身を立て直そうとして、足を一つの敷石においた瞬間」（IV.p.445）であり、その敷石は「一つ前の敷石より少し低くなっていた」と説明されている。つまり問題とすべき感覚は、敷石との接触感ではなく、少し低くなっている敷石を踏んだときの低いという感覚である。足が予測よりも下方に沈む、体全体の動きの感覚といえる。こうした理由から、「不揃いの敷石」は触覚より運動感覚に分類するのがふさわしいように思える。

とすればこの段階では触覚体験は構想されていないことになる。これが『失われた時を求めて』になると以下のように変更される。

味覚：母のいれた紅茶とマドレーヌ菓子→レオニー叔母のすすめた紅茶
または菩提樹の煎じ茶とマドレーヌ菓子

嗅覚：シャン・ゼリゼのトイレの匂い→アドルフ叔父の部屋の匂い

視覚：ユディメニルの三本の樹木→思い出せず

運動感覚（触覚）：ゲルマント大公妃邸の中庭の不揃いの敷石→サン・

マルコ寺院の不揃いの敷石

聴覚：皿にスプーンが当たる音→鉄道員のハンマーの音

触覚：ナプキンの感触→バルベックの第一日目

『失われた時を求めて』にはこの他にもレミニサンスと呼べるいくつかの体験があるが、煩雑になるため代表的なものだけを挙げた。この両者を比較したとき、嗅覚と触覚がはっきりした形で付け加えられているのがわかる。嗅覚については、『サント・ブーヴに反論する』にも「サクランボの匂い」が挙げられている上に、喘息持ちのプルーストが嗅覚に鈍感であったとは考えられず、後から付け加えられたという理由でその下位性を論じることはできない。一方触覚については、その後発性ととともに、視覚や聴覚のように類似した他のレミニサンスを持たないことを考え合わせれば、他の感覚に比べて下位に位置するという印象は拭いがたい。おそらく一番最後にプルーストが思いついたか、あるいは思い出したレミニサンスなのではないか。しかし下位であろうと、この触覚はプルーストの感性の世界にとって不可欠な要素であった。触覚が加わってついに、プルーストのレミニサンスを核とした五感の世界が完成するのである。ボードレールの「コレスポンダンス」は「香り (les parfums)」（嗅覚）、「色 (les couleurs)」（視覚）、「音 (les sons)」（聴覚）から成るが、プルーストはそこに味覚と触覚を加えることでより高度な「コレスポンダンス」を意図的に完成させたといえる。

触覚への意識は、もうひとつのレミニサンス、「心の間歇」を通しても窺える。二度目のバルベック滞在のとき、かつて祖母と来たときと同じホテルに入り、部屋で靴を脱ごうとした瞬間、突然祖母を思い出すという、この有名なエピソードにおいて、その瞬間は次のように語られている。

「私という人間全ての転倒。到着した最初の夜から、疲労のため心臓が苦しかったので、この苦しさを抑えながら、ゆっくりと用心深く身を屈め、靴を脱ごうとした。ところがショート・ブーツの最初のボタンに手を触れたとたん、私の胸は膨らみ、ある神聖な未知の存在に満たされ、嗚咽が私を揺さぶり、涙が目から流れ落ちた。」(III.152-153)

この瞬間は、「ショート・ブーツの最初のボタンに手を触れたとたん (à peine eus-je touché le premier bouton de ma bottine)」という表現から、いかにも触覚が媒体となっているように見えるが、実のところ触れる行為は直接的には過去と関係していない。共通しているのは、この引用の後で正確に述べられている通り、靴を脱ぐために身を屈めるという動きである。身を屈めるという主人公の動きが、かつて「祖母が私の方に身をかがめた瞬間」を蘇生させたのであり、靴のボタンに手が触れる、触れないの問題ではない。正確には、「触れた瞬間」ではなく、「触れようとした瞬間」であろう。草稿段階では、主人公が祖母を思い出すのは列車の中でまどろみ始めたときのことで、思い出される瞬間は「祖母が私の着替えを手伝ってくれた瞬間」となっている。ここでは、触れるという行為はまったく問題になっていない (IV, Esquisse X II.1032 et Esquisse X III.1032-1035)。にもかかわらず、最終的に「ボタンに触れたとたん」という表現を用いているところに、プルーストの触覚への意識を読みとるべきであろう。小説のこの段階ではすでに、マドレーヌ菓子 (味覚)、トイレの匂い (嗅覚)、三本の樹木 (視覚) というレミニサンスが既出であり、順番的には次は聴覚か触覚、というはっきりとした意識がプルーストにあったかどうかはわからないが、少なくとも「心の間歇」というレミニサンスに触覚を割り振りたいという意図はあったのではないか。そのためか、ある種の齟齬をきたしてはいるものの、結果的に「心の間歇」は触覚の復権をもたらしたともいえる。

III. 目覚める触覚

前章では、プルーストが抱いていたと思える、触覚復権へのささやかな試みについて述べたが、それはレミニサンスという限られた観点からのもので、プルーストの世界では全般的には依然として触覚の下位性は動かない。しかし、私たちのが普段の生活において触覚よりむしろ、視覚、聴覚の恩恵より多く受けているという事実を照らし合わせれば、こうした触覚の下位性は不思議なことでも、プルーストの特徴を示すものでもない。そ

の特徴が表れるのは、下位性においてではなく、触覚が自らの下位性を自然なものとして受け取ることができず、上位を窺う姿勢を見せるときである。そしてそのときには必ず性的欲望 (sexualité) が絡む。

プルーストには、愛する者に触れたいという欲望が潜在している。潜在しているということは普段は抑圧されているということでもある。原因の一端はおそらく、彼の内気で恥ずかしがりの性格にある。アルベルチーナたちとフュレ遊びをしていたとき、彼女の横にいる若い男の手が彼女の手に触れているのを見て、主人公は羨ましく思っていたが、いざ自分がその立場に立ったとき、「その接触を探すには余りに内気で、それを味わうには余りに感動していたので、感じるのとははや苦しげな早い鼓動だけだった」(II.273)と述べられている。プルースト自身が極度の恥ずかしがりであったことは、作家の死ぬまで身の回りの世話をしたセレスト・アルバレの証言するところである¹³⁾。しかしこうした性格は表面的なもので、真の原因は他者の視線への意識にあると思える。なぜなら、もし見られていないことがわかれば、そうした内気な性格のことはすっかり忘れて、大胆な行動にでることをプルーストは厭わないからである。モンジューヴァンとジュピアンとの娼窟での覗きが証明している通り、見られずに見ることはプルーストにとって、かけがえのない快楽であった。触れる快楽もこうした見る快楽同様、他者の視線の不在を前提とはしているが、見られていないことがすぐに触覚を呼び覚ますかというところがそうはならない。眠っているアルベルチーナを見つめる主人公は、彼女から見られていないにも関わらず、彼女に触れようとしないう。彼は見ることだけで満ち足りている。肘掛け椅子に掛けられた彼女の着物に触れもせず、そのポケットに入っているはずの手紙を取り出そうとさえしていない。ではいつ主人公は眠る恋人に触れるのか。それは明かりを消したときである。

「ときどき私は彼女が入ってくる前に明かりを消していた。暗がりの中を、かろうじて残っている暖炉の火を頼りに彼女は私の隣に横になりに来た。私の手と頬だけが彼女を識別し、私の目は彼女を見てはいなかった。目は彼女が変わったことがわかるのをときどき怖がっていた。

だからこの盲目の愛のおかげで、彼女はいつもよりもっと多くの優しさで浸されていると感じていたはずである。」(III.584)

このようにブルースト的触覚は、相手ばかりでなく自らもほぼ視覚を失った状況、つまり暗がりの中で隠微に目覚める、というより正確には欲望を目覚めさせる。この場面では彼女に触れることは、欲望というより「盲目の愛」として、言い換えれば優しさの表現としてとらえられているが、それは対象が愛する女性であるからで、もしそれが行きずりの未知の女性であったなら、彼の触覚はこのような「盲目の愛」では我慢できず、唐突に凶暴性を帯びる。主人公は現実ではなく、願望つまりファンタスムとして、ドンシエールとパリで二度この触覚の凶暴な目覚めを体験している。一度目のドンシエールするとき、主人公はサン・ルーと夕食をとるため「大寺院の前の暗い小路」を歩いていた。「闇は深かった (L'obscurité était profonde.)」。そのとき、主人公は次のような思いに突然襲われる。

「そんな暗がりの中で、もし突然あるドレスが通過するのを感じるようなことがあれば、私が体験している快樂の激しさそのものによって、私はその接触 (ce frôlement) が偶然とは考えられず、おびえて過ぎ去ろうとする女性を腕の中に抱き込もうとするのだった。」(II.396)

ここでいう「接触」とは、決して即物的なものではなく、触覚への呼びかけととらえるべきであろう。この「接触」が性的欲望を喚起した背景には、このとき主人公の頭を占めていたゲルマント侯爵夫人への思いがあったことは確かで、その思いが通りすがりの女性への欲望に転嫁されたと考えられる。しかし、もしこれが暗がりでなかったならこうした欲望は起こらなかったであろう、というところに触覚と暗がりの密接な結びつきがある。もうひとつのパリでの体験は、そのことをより明確に示している。戦時中ドイツ軍の空爆を避けるため、主人公はパリの「カタコンブのように暗い」地下鉄の通路に逃げ込んだことがあるが、その場面を利用して、暗がりの効用が次のように説明されている。

「ところで暗がりは、新しい要素としても全体を浸し、ある種の人々

をどうしようもなく誘惑し、その結果、快樂の第一段階を抹消し、普段なら時間がたってからしかたどり着けない接吻の領域へ即座に私たちを招き入れる。」(IV.413)

そしてその暗がりの中での対処法として、次のように続ける。

「暗がりの中では、こうした古いお遊びは廃止され、手、唇、身体が最初に動き出す。もし受け入れられなければ、暗がりのせいにして、そのせいで間違っただのと言えればいい。」

「こうした古いお遊び」とは、通常の見て話しかけるという行為である。それはともかく、引用文からもわかる通り、ドンシエールの場合もパリの場合も、主人公は行動に移したわけではなく、かなえられない願望として語られている。しかしこの願望が行動に移されるか否かは紙一重である。というのも主人公は一度だけ、ドンシエールでこの願望を叶えている。ステルマリア夫人との夕食がキャンセルされた夜、偶然訪れたサン・ルーと外食に出ようとしていたとき、主人公は突然ある出来事を思い出している。雪のため仕方なく入ったレストランの小部屋でのことで、食事中ランプが消えたため、給仕の女性が二本のローソクを灯してくれる。

「私は皿を差し出し、彼女がそこにジャガイモをのせている間に、暗くてよく見えないふりをしながら、彼女を案内するかのようにして彼女のむき出しの腕を握った。彼女が腕を引っ込めないのがわかると、その腕に接吻し、次に何も言わずに私の方に引き寄せ、ローソクを吹き消してから、私を探ってお金を少し取るように彼女に言った。」

(II.690)

主人公が突然この性的な出来事を思い出したのは、ゲルマント公爵夫人への思いのときと同じように、期待していた夫人との夕食がキャンセルされ、行き場を失った欲望がはけ口を求めた結果と考えられるが、理由はともかく、ここで注目すべきは触覚と暗闇の見事な共謀性である。触覚と暗がりは共謀して、主人公に内気さを忘れさせ、快樂の世界に導いている。

IV. 転稼される触覚

プルーストは、自分の考え方、感じ方を『失われた時を求めて』の「私」に注入している。しかし自伝でない以上、ぴったりと重なるわけではなく、所々でずれが生じている。その典型はユダヤ性と同性愛で、プルーストはユダヤ人の母をもち、若い頃から友人たちに同性愛的性向をからかわれていたにもかかわらず、「私」からはそうした生まれと性向を消し去っている。これを芸術的配慮と見る向きもあるが、やはり多くの知人、友人が読むことを考え、作者が意図的にそれらを主人公の属性から排除したととらえる方が自然に思える。その代わりにプルーストは、スワンに代表される何人かのユダヤ人を、またシャルリュスに代表される数人の性的倒錯者を登場させたのであろう。触覚についても同じことが言える。前章で述べた通り、主人公は触れたいと思いつつも自由に触れることができない。彼の触覚は普段は抑圧状態にある。一方こうした主人公とは対照的に、抑圧を感じることなく、積極的に触覚を楽しむ人物がいる。シャルリュスとアルベルチヌスである。彼らは作者の抑圧された触覚を転稼され、その結果作者の欲望を投影し、それを代弁している。

シャルリュスは最初のうちこそ視覚の人にとどまっているが、徐々に本性を表してくる。ゲルマント家の人々は握手するとき、最初距離を十分とって相手を見つめ、次に近づいて「手をいっぱい伸ばし、奇妙な戦いのために剣をつきだしているような格好をする」(II.p.736)。ゲルマント家の一員であるシャルリュスも握手のとき同じ様な格好をするが、彼の特徴は、このとき差し出すのは中指と薬指だけだという点にある。この奇妙な握手は一見、他者との接触が嫌いで、そのためできるだけ接触面を少なくしようとしているのかのように見せながら、実は相手次第ではもっと触れたいという欲望を秘めていた。次にヴェルデュラン家の夜会で主人公に会ったとき、男爵はその帰りがけ自分のハーフコートをも主人公の肩に掛ける機会を利用して、主人公の顎を手で撫でている(III.p.798)。また数年後、大戦中に久しぶりに会ったシャルリュスは、主人公の手を「粉碎するほどに握りしめ」、「もみほぐした」(IV.388)。それに続く文で、「ある種の

盲人たちにあつては触覚はある程度視覚を補っていた。彼の握手の場合、触覚がどんな感覚の代わりをしていたか、私にはわからない」と述べられているが、その握手の仕方が同性愛的性向の表れであることは十分主人公にはわかっていた。だからその後で、その度が過ぎていたことで、「彼には罪があつた」と結論づけられている。触覚も過剰になると罪であるという。実はシャルリュスの兄ゲルマント公爵も、握手の仕方において過剰性を示すときがある。ある日、ゲルマントの館の中庭で、公爵は父の手を「高等娼婦のような恥じらいのなさで」（II.333）さすっている。確かにその過剰さには兄弟間に流れる共通したものが感じられるが、その動機は明らかに違う。公爵の動機は「自分の貴重な肉体に触らせてあげることを厭わない」という思上がった、貴族的なものであるのに対し、シャルリュスの動機は触れたいという欲望である。シャルリュスにとって、この触れたいという欲望と触れられたいという欲望は表裏一体である。この欲望が握手だけにとどまらず、血まみれになるまで釘の付いたむちで打たれるという、マゾヒストの段階にまで達するところにシャルリュスの怪物性がある。むちに打たれることを好むということは、極度の接触愛の証明でもある。湯沢氏はこのことから、シャルリュスを「『接触の過剰』というカテゴリーに分類されるべき存在」としている¹⁴⁾。氏はさらに、そのカテゴリーには主人公も含まれるというが、主人公は幼年期大叔父に髪を引っ張られて以来、痛みを伴う過剰な接触を恐れ、忌避の対象となっていたようで、彼が接触の過剰性を愛した痕跡はない。確かにアルベルチーナたちとフュレ遊びをしたとき（II.273-274）、主人公は彼女に手を握られ喜びの絶頂に達しているが、それも束の間、彼女の「早く（フュレの輪を）取りなさいよ」という一言で奈落の底に突き落とされている。まるで主人公には接触の喜びが禁じられているかのようである。このカテゴリーに属するのは、むしろアルベルチーナであろう。

アルベルチーナもまたシャルリュスと同様、触れること、あるいは触れられることを過剰に好む。彼女はあるカジノで女友達のアンドレと踊っていたとき、互いの胸を密着させていたため、それを見ていた医師コタール

は「彼女たちは間違いなく快樂の絶頂にいます。女たちが快樂を覚えるのは特に乳房によってかどうかはよくはわかっていません。でもご覧なさい。彼女たちの胸はぴったりくっついています」(III.191)と主人公に指摘している。またバルベック近郊を主人公とドライブしていたとき、飲んだばかりのシードルの影響もあって、彼女は「普段なら気につけない彼女と私の間隔に耐えられなくなって、麻のスカートの下で自分の足を私の足に絡まし、頬を私の頬に近づけた」(III.403)。しかしなによりも彼女の接触愛を証明しているのは、エメの報告である。アルベルチーヌの死後、主人公は出奔後の彼女の素行調査をバルベックのホテルの給仕長エメに依頼し、彼女が戻った先の叔母ボンタン夫人の住むトゥーレーヌ地方に派遣している。そのエメが洗濯屋の娘から聞いた話によると、アルベルチーヌはいつもグレーの服を着た背の高い女性といっしょで、海辺の木陰で女性に首や腕を舌で愛撫されていたという(IV.105-106)。同じことを娘がアルベルチーヌにしてやると、アルベルチーヌは興奮のあまり娘の腕にかみつ、その跡がまだ残っているという。彼女の過剰さの痕跡である。彼女の過剰さはさらに、シャルリュスのマゾヒズムを越えて、彼女に死をもたらしている。彼女の死は単純には落馬死であるが、彼女はその拍子に木にぶつかっている。叔母のボンタン夫人は「あの子は遠乗り中に落馬して木にぶつかったのです」(IV.58)と主人公に電報で知らせている。その死に方は、過度の接触を愛した人間にふさわしいものであった。モーリス・バルデッシュに拠れば、アルベルチーヌは最初の草稿ではオフエーリアのように水死することになっていた¹⁵⁾が、落馬して木にぶつかるといふ、過剰な接触による死の方が彼女にはふさわしいと判断しておそらく、プルーストは彼女の死に方を変更したのであろう。

V. 奪われた触覚

触覚に関連する身体上の部位はいうまでもなく手であるが、唇もまたキスという行為を介して、ときには性的行為において、ときにはフランス人にとっては日常的な挨拶において重要な位置を占めている。一般的にキス

は、性的快楽をもたらし、他者との結び付きを再確認する部位と考えられている。しかし、プルーストの世界ではキスは親愛の情や快楽をもたらすものではなく、初めからキスそのものが、さらには触覚そのものが奪われている。作家の悲しみの源泉の一つはここにある。

有名な「就寝の劇とドラマ」の原因は、スワンの訪問によって少年が母にお休みのキスをしてもらえなかったことにある。同じ「ドラマ」を描いた『ジャン・サントゥユ』では、窓から呼ぶ息子を見かねた母が部屋に入ってきてジャンにキスをしている。「彼女の熱いキスを受けて、それまでの彼の動揺は鎮まり、甘美さと涙になった」¹⁶⁾となっている。それに対し、『失われた時を求めて』の主人公にはこのような幸福は訪れず、キスは奪われたままである。父の例外的な許可により、母とともに過ごすという幸福な一夜もあったが、その夜でさえ二重の意味でキスは奪われている。第一に、スワンが来たときにはベッドでのキスの代わりに、テーブルを離れるときに母にキスをするようになっていたにも関わらず、この夜はそのキスが奪われている。この夜も主人公はテーブルを離れるときキスをしようにするのだが、その瞬間に食事を知らせる鈴が鳴り、祖父の「いけない、さあ、お母さんを放しなさい」（I.27）という一言で、少年は「最後の聖体拝領も受けずに」、鉄製のベッドの待つ自室へと階段を上らねばならなかった。第二に、この例外的な夜でさえ、母は子にお休みのキスをしていない。母がその夜したことは、ジョルジュ・サンドの小説『フランソワ・ル・シャンピ』を読んで聞かせることのみであった。つまりプルーストは、この母へのキスを最初から奪われたものとして措定している。この悲劇性は、アルベルチヌへの初めてのキスの試みにも通底している。バルベックのホテルで、彼女の部屋に入り、ベッドに横たわる彼女にキスをした瞬間、彼女はベルを鳴らし拒絶している（II.286）。このベルは、同じように母へのキスを奪った食卓を告げる鈴の音と、スワンの来訪を告げる裏木戸の鈴の音と共鳴して、触覚の剝奪を告げている。

キスはアルベルチヌのような恋人へのものであれば、性的行為の一種と考えられるが、プルーストの場合はそうならない。彼にとって真の性的

行為とは、モンジューヴァンに代表される覗きであり、距離を前提として
 いる。ジョルジュ・プーレはプーレストにおける距離について次のように
 述べている。「事物は存在するが、距離をおいて存在する。消去すること
 も還元することもできない距離である。プーレストの世界では、人は互い
 に接近したり触れ合ったり、友愛をうち立てたりできない。(略)プーレ
 ストにとって距離は悲劇的でしかあり得ない」¹⁷⁾と。しかし、性的な観点に
 立つと、プーレストにとって距離は必要条件であり、むしろキスという距
 離不在の状態の方が悲劇的であった。その根本的な原因は、プーレストが
 キスに求めたものは、触覚ではなく味覚であったことにある。主人公はバ
 ルベックでは失敗に終わったアルベルチーヌへのキスを、パリのアパート
 マンで再び試み、このときは成功しているが、このとき彼の心を占めてい
 たのはバルベックのときと同様、「ついに今からアルベルチーヌの頬とい
 う未知の、バラ色の味を知ることになるのだ」(II.659)という思いで
 あった。ところが実際には、キスはこの思いを叶えないばかりか、次の通
 り悲惨さだけを残す結果となる。

「突然私の目は見ることをやめ、次に鼻が押しつぶされてどんな匂いも
 感じなくなり、そのため切望していたバラ色の味をそれ以上深く知る
 ことができなくなった。こんな何とも嫌な前兆から、ついに私はいま
 さにアルベルチーヌにキスをしているところだということを悟った。」
 (IV.660-661)

この語りには、奇妙なことに触覚が完全に欠落している。彼女の頬は柔
 らかいのか固いのか、すべすべしているのかざらざらしているのか、そう
 した感触がいつい無視されている。主人公がキスを認識するのは、そう
 した感触以前の、視覚、嗅覚を圧殺された状況によってである。この原因
 は明らかに、味覚という舌にあるべき機能をプーレストが唇に求めていた
 ことにある。ところがプーレストは、人間は雲丹よりも、鯨よりも進化し
 ているのに、なぜ人間の唇は味覚を伝えないのかと嘆いた末に、唇は「食
 欲をそそるものの味を口の中に運ぶためにつくられていて」、「ただ表面
 をさまよい、欲望をそそりはするが入り込めない頬の仕切壁にぶつかるだ

けで我慢しなくてはならない」(IV.659)という理由で、唇を断罪する。イチゴ味のアイスクリームを食べるアルベルチーヌも、そのアイスクリームをヴェネチア教会に見立てた上で、「私が唇に与えている仕事は、イチゴ製の班岩から成るヴェネチア教会を、柱から柱へ壊してゆくこと」(III.637)である、という。ここでも唇は破壊の道具であって、触覚の機能を全く持っていない。つまりプルーストにとって唇は、キスのときも食るときも、完全に触覚という機能を奪われているということである。

結び

晩年こそプルーストはごくわずかな食事しかとらなかつたが、彼が美食家であったことは、『失われた時を求めて』にでてくるいくつかの食事の場面を想起すれば十分理解できる。匂いに敏感であったことは、彼が若い頃から空気中の埃、枯れ草、花粉等に原因する喘息に悩まされていたことを思い起こせば、当然といえば当然である。視覚、聴覚の重要性については、彼の絵画、音楽への関心の深さからしていうまでもない。

では、プルーストにとって触覚の働きとは何であったのか。これまでみてきた通り、第一にそれは、視覚を陽画とするなら、触覚は明らかにその陰画であった。両感覚は共存を許されず、暗がりという視覚が機能を停止したとき初めて、触覚は活動を開始した。補完的というより、もっとゲリラ的で、突発的な働きである。第二に、他の感覚を正とするなら、触覚は負の感覚であった。キスのことからわかる通り、恋人へのキスは何ら喜びをもたらすことなく、最愛の母へのキスは初めから奪われていた。機能しないことが機能であり、その機能しないことがときには喜劇を、ときには悲劇を生み、プルーストの心に拭い去れない傷痕を残していた。そして第三にいうまでもなく、ナプキンの感触による過去の蘇生である。この瞬間、現在と過去が融合し、主人公は歓喜に満たされる。この瞬間は同時に、それまで陰画であり、負であった触覚が、陽画と正に反転した瞬間であり、また視覚のたどり着けない地点に達した瞬間でもあった。エルスチールは、視覚に対する触覚の優位をさりげなく主人公に教えたことがあった。バル

ベックにある教会の正面に失望したという主人公に対して、この画家はその正面に彫られた聖書物語を逐一採り上げ、ある箇所について次のように説明している。

「聖母とエリザベートとの出会いで、エリザベートがマリアの胸に触り、それが膨らんでいるのを感じて驚くあの身振り、触らずには処女懐胎を信じようとしなかった産婆の、包帯を巻いた腕、(略)」

(II.196-197)

人は頭の中では処女懐胎を信じていないので、マリアの胸の膨らみという現実が見えない。ところが、触覚は瞬時にそうした視覚と知性による判断を粉碎するという。とはいえこれは聖書の世界での話で、もしプルーストの世界で同じ様な触覚を探すとすれば、ナプキンの感触をおいて他にない。マルタンヴィルの鐘塔のときも、ユディメニルの三本の樹木のときも、その背後に隠されているものが読みとれなかったのは、おそらく知性の介入を容認する視覚を通しての体験であったためであろう。触覚を含め、視覚以外の感覚を媒体としたとき過去の発見に成功しているのは、それらが知性の介入を許さないほどの瞬間的な出来事であったためであろう。いずれにしてもこの瞬間、触覚は視覚を越えている。この意味でナプキンの感触は、プルーストにとってかけがえのない体験で、プルースト的触覚の理想的な顕現といえる。

(奈良大学助教授)

注

- 1) テキストには、Marcel Proust ; *A la recherche du temps perdu*, 4 volumes, Bibliothèque de la Pléiade, 1987-1989 を使用。以下巻数とページ数のみ示す。引用は拙訳による。
- 2) Marcel Proust ; *Jean Santeuil*, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, p.758
- 3) *Ibid.*, p.770
- 4) M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学2』(竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳), みすず書房, 1974, p.165
- 5) ダーヴィット・カッツ『触覚の世界』(東山篤規・岩切絹代訳), 新曜社, 2003,

pp.i-ii

- 6) *Ibid.*, p.179
- 7) Jean-Pierre Richard ; *Stendhal Flaubert*, Points , Editions du Seuil, 1970, pp.145-146
- 8) Jean Rousset ; *Leurs yeux se rencontrèrent*, José Corti, 1981, p.115
- 9) *Ibid.*, pp.61-62
- 10) Jean Pommier ; *La mystique de Marcel Proust*, Librairie Droz, 1968, pp.5-11
- 11) Marcel Proust ; *Contre Sainte-Beuve*, Idées, Gallimard, 1968, pp.55-63
- 12) Simone Kadi ; *Proust et Baudelaire : influennces et affinités électives*, La Pensée Universelle, 1975, p.222
- 13) セレスト・アルパレ『ムッシュウー・プルースト』(三輪秀彦訳), 早川書房, 1977, p.111
- 14) 湯沢英彦『プルーストの冒険』, 水声社, 2001, p.126
- 15) Maurice Bardèche ; *Marcel Proust romancier 2*, Les Sept couleurs, 1971, p.281 (note2)
- 16) Marcel Proust ; *Jean Santeuil, op.cit.*, p.207
- 17) Georges Poulet ; *L'Espace proustien*, Editions Gallimard,